

ハズとカネルのモダリティ的用法について

伊 藤 達 也

この論文では、はじめに日本語のハズ（例「彼は来るハズだ」「彼が断るハズがない」）とカネル（例「承諾シカネル」「大変な事になりカネナイ」）という二つの語彙単位のモダリティ的用法を記述する。次に「発話理論」から発展した「構築主義意味論」（Franckel & Paillard 2007）およびDufaye（2009）らによる英語のモダリティ研究を参考にしながら、何故このような用法が可能かを考える。最後にモダリティのカテゴリー的特徴として「分岐」の図式形式が召還されることを指摘し、この「分岐」の上に、ハズの持つ「接近」およびカネルの持つ「両立」の図式形式が上書きされることで意味が構築されることを示す。

1. ハズとカネルの記述

1.1. ハズ

まずハズという語彙単位の辞書による記述を『大辞林』の引用から見てみる。

はず：①弓の両端の弦をかけるところ。弓筈。②弓弦からはずれないように矢の末端につけるもの。矢筈。③相撲で、押し相撲の手の型の一。親指を人差し指から離して広げ、相手の脇の下か腹にあてること。②に形が似

ているから言う。「——に押す」④（矢の筈は、弓の弦と当然合致することから）連体修飾語を受けて、形式名詞的に用いられる。ア. 当然そうなることの意を表す。「これで電気がつく一だ」「この地図を見れば分かる一だ」イ. これからの事柄についてその予定を表す。「五時には終わる一だ」ウ. 事柄についての確信、確認の意を表す。「君に頼んだ一だ」——が合わぬ。予想や見込みがはずれる。「人の妻となって——ず／浮・禁短気」——を合わす。①調子を合わせる。「——する人のかしこさ／犬子集」②約束を果たす。〔日葡〕

現代日本語においてハズは、頻度の点では「に違いない」の意味を持つ認識的モダリティのマーカ―としての使用（引用の分類では④）が多いが、この記述から、語源的には弓矢の部分の名称であることが分かる。百科事典の記述を見るとハズと呼ばれる部分は弓と矢の両方に存在しており、より正確には弓筈（ゆみはず）は末筈（うらはず）と本筈（もとはず）に分かれ、末筈は弓の上部の端、本筈は弓の下部の端の名称である。矢筈は矢羽の後方に取り付けられた水牛の角やプラスチックでできた部分で英語では *nock* と呼ばれ、矢本体とは筈巻でつながれている。ちなみに英語の *nock* は動詞としても使われ、意味は「矢を弓にかける」である。

③については、相撲の型の一つとして、ハズの名詞的な意味に込められた「引っ掛けること」からの連想で与えられた名称であると考えられる。しかしこの辞書の分類で①、②（ないし③）の名詞としての意味と④のモダリティの意味とはかなりの隔たりがあるように思われる。したがって同じ語彙であるハズの名詞としての意味とモダリティ・マーカ―としての意味がどのように関連しているかを考察する必要があるが、その前にハズのモダリティの意味の特徴を記述しておくことが重要である。

1.1.1. ハズのモダリティ的意味の記述

ハズがモダリティ的な意味で使用される場合、他のモダリティのメーカー、例えば、「に違いない」、「べき」などとどう違うだろうか？

「5時に終わるはずだ」では、「5時に終わる」というまだ実現していない（未来に投影された）状態を発話主体が、ことの成り行きの当然の帰結として予想していると考えられる。そのため「5時に終わるはずだ」は「5時に終わるに違いない」とパラフレーズが可能なのである。両者ともある実現していない状況を発話主体が選択しているという共通点がある。当然ながら使用している表現の違いにより、この未来予想の現実性の違いはそれぞれの表現で異なっている。「はずだ」と「違いない」では、「違いない」の方が現実性が高いと思われる。「5時に終わらない」を0%、「5時に終わる」を100%、その中間の「5時に終わるかもしれない」を50%とすると、「筈だ」も「に違いない」もそれ以上の現実性を表している。あえて数字で表すと「筈だ」は80%、「に違いない」は90%くらいの現実性であろうか。

それに対して、「5時に終わるべきだ」では、主観的な現実性というよりも、義務的な読み方が強くなり、なりゆきで自然にそうなる「筈だ」より、様々なつじつまを合わせてでも終わらせる「べき」だという解釈が支配的となる。「べき」では「5時に終わる」というまだ実現していない状態を発話主体が選択すると同時に、それ意外の可能性を強く排除している。そのため義務的な意味が強く出ているのである¹。

否定を伴う場合は注意が必要で、「5時に終わる筈（が／は）ない」では、「5時に終わらない」を選択しているのである。したがって、この文のパラフレーズは「5時に終わらないに違いない」である。「筈」はこのように、否定の作用域になりえない。否定がはたらくのは、「終わる」に対してである。「べからず（古語、文学的）」「べきではない（口語）」はともに禁止の意味が強くなるが、この場合も「友人から借金をするべからず／べきではない」などのように、意味的には、否定は「べき」ではなく「借金

をする」にかかると考えられる。したがって「友人から借金をすべきではない」は「友人から借金をしないべきである」を強めた形であり、英語の *must not* に近い、禁止表現である。この場合も、「べき」がまだ実現していないある状態の選択と同時に他の可能性の排除を行っている事が理解される。その点、ハズは他の可能性の排除まではいかず、まだ実現していない状態の選択だけを行っているのである。従ってハズには強い義務あるいは（否定を伴って構築される）禁止という義務的（*déontique*）解釈は認めにくく、認知的（*épistémique*）解釈が優先される。

「違いない」も選びとるオペレーションに関連づけられるが、形容詞「違い」と否定「ない」から構成されていることから分かるように、「それ以外」の否定というオペレーションを含んでいる。つまり、ハズと異なり、「違いない」では、「何かを選びとること」は「それ以外を排除すること」から到達されている。「違いない」に認められる現実性の高さは、この「それ以外の排除」を含むことから来ている。ハズはこの排除を含まず、純粹にある状態への「選択」がある。もし「選択」という言葉が、二者択一のように他方の排除を含んでしまう可能性を嫌うならば、ハズにだけ当てはまる特徴としてある状態への主体による「接近／近づき」があると言い換えることも出来る。要約すると、ベキは「排除」、ニチガイナイは「選択」、ハズは「接近」に関係づけられる。

1.1.2. ハズと *accès* (アクセ：接近)

モダリティのマーカ―としてのハズには、このように「まだ実現されていない状態」への *accès* (アクセ：接近／近づき) という図式形式を関連づけることができる²。先の辞書の引用箇所からも、ハズはまた名詞として「予想」、「見込み」の意味で使われた例がある事が示されている。ハズは発話主体がある状態に心理的に接近／近づくことで、これが「予想や見込みを立てること」という意味に結実する。

この図式形式との関連を見た上で、名詞的な用法に戻ることができる。「筈」は弓矢の部分としては、弦と弓をつなぐ箇所であり、また矢に弦を引っ掛ける箇所でもあることを思い出そう。つまり、「筈」という場所においては、弓と弦という質的に異なった部分の間に *accès* (接近／近づき) が発生している。この接近／近づきは固定的、ないし安定的なものではなく仮設的、一時的なものであり、質的な他性が維持されたまま、接近／近づきをし、常に他性は解消されない。

「見込み」「予想」の意味のハズにおいても、事実に対してではなく、仮想された、あるいは、未来に投影された状態への、発話時点からの一時的な「接近／近づき」をマークしていると考えられる。つまりそこで二つの質的に異なる状態が、他性を維持したまま、発話時点において、一時的に近づいているのである。この接近は、客観的な事実ではなく発話主体の力によって実現している。また、「違いない」「べき」とは異なり、それ以外の状態の強い排除（否定）を含まない、いわば弱い接近がある。したがってあくまでも主体的な「見込み」「予想」の意味であり、他者へとはたらきかける「義務」「禁止」などの意味が生じえないのである。

このように、形式的、抽象的な観点から見ると、名詞の「筈」と文法的ハズとの間に共通点が見えてくる。一方が物の名称、他方が発話者の発話内容への認識的な態度、と現れ方は違うものの、「質的に異なるもの／こととの間の接近」が常に観察されるのである。この図式が中核となり、発話の具体的な局面において、言表の中で語彙単位と相互作用を行う語彙的文脈である *co-texte* (コテクスト) の入力を得て意味が構築される³。

すなわち、単独で用いられた場合、あるいは「矢」「弓」などの名詞的補語がある場合、「接近」という図式形式そのものが意味として現れる。それは「一時的な結びつき」、「引っかけること」あるいはそれを司る部分（弓矢）、その形式（相撲の型）なのである。それに対し、連体修飾語を伴って使用される場合、この連体修飾語がコテクストとして機能し、この部分をもたらす情報が、ハズが意味を構築する際に重要となる。「5時に終わるは

ずだ」では「5時に終わる」がそれに当るが、この部分が、未だ実現されず、未来に投影された状態を導入し、そこへ発話時点から発話主体が一時的な「接近／近づき」を築くのである。その図式が、発話時点においてのみ有効な「予想、見込み」という意味として具体化するのである。

1.2. カネル

カネルに関しても『大辞林』の引用から見ていくことにする。

かねる：①二つ以上のはたらき・役割を併せもつ。「食堂と居間を一ねた部屋」「大は小を一ねる」「趣味と実益を一ねた仕事」②本務の他に別の職務を同時に務める。「首相が外相を一ねる」③（多く「気かねる」の形で）遠慮する。気を遣う。はばかり。「相手の気を一ねる」「姑の手前を一ねる」④将来の事まで予定する。「千年を一ねて定めけむ奈良の都は／万1047」⑤長い年月または広い距離に及ぶ。「あらたまの年月一ねてぬばたまの夢に見えけり君が姿は／万2956」「桜咲く四方の山辺を一ぬるまに／山家春」⑥（動詞の連用形について）ア. しようとしてもできない。……することに堪えられない。「引き受け一ねる」「見るに見一ねて手伝う」イ. 「……かねないの形で」その可能性があることを表す。……するかもしれない。……しそうだ。「放っておいたら自殺し一ねない」「そのまま出て行き一ねない」

①と②はカネルに一般的に関連づけられる「両立」という意味でまとめられるように思われる。問題は⑥のモダリティ的な助動詞の用法。意味的には「できる」「できない」にあたる用法と①②との関連である。しかも、このことは多くの外国人の日本語学習者を混乱させているが、①②に場合であれば、「大は小を兼ねる」「大は小を兼ねない」などのように、否定が接続してもカネルという動詞の意味が否定されるだけだが、⑥のモダリティ

的な用法の場合は、否定を伴ったときに、「可能性がある」という肯定的な意味に、また否定がない場合に「可能性がない」と否定的な意味になるのである。したがってカネルのモダリティの意味の考察には、必然的に否定の操作についての考察も必要となるであろう。

③と④は古語の例であるが、カネルが予測という意味で使用された例として興味深い。⑥の「可能性」とは別の意味でのモダリティに関係する用法であるが、「気かねて」の形でとあるように、熟語化していた可能性もある。また⑤も現代日本語では見られない用法だが、空間的広がりを表すという意味で、「両立」からの連続性で意味を把握することもできる。これらの用法については、本論の目的上、直接的な考察の対象からは外れるが、図式形式の観点から説明できる可能性は排除されてはいない。そのためには、まず両立するという意味の支配的な本動詞のカネルがなぜ「不可能性」の意味で、またその否定、カネナイが「可能性」の意味で使われるのかを考察する事から始める。

1.2.1. カネナイ

「その仕事は引き受けかねる」という場合、引き受ける事が不可能だと言っている訳だが、不可能性は主に発言の主体から来ている。主体はその仕事が可能にできるにもかかわらず、主体の意思で実現を拒んでいるのである。カネルの場合、不可能性は客観的ではなく、あくまでも主体が主観的に判断するのである。

他方「このまま放置すると重大な事故を引き起こしかねない」という場合、「可能性がある」という意味だが、主体的な介入はほとんど感じられない。主体が判断しているという様子さえなく、客観的なデータや歴史をもとに予測されたことという解釈である。それに対し、「引き起こすかもしれない」の場合は、知覚動詞「知る」が含まれていることも関係して、主体の介入、予想としての価値が強く感じられる。

本質的に、本動詞としてのカネルのもつ「両立する」は、肯定的な意味にもなりうるが、「二足のわらじ」のように、どっち付かず、ひいては決定不可能という意味まで行きうる。この「両立」の否定的な側面が、モダリティ的用法では全面に出て来ているように思われる。本動詞的用法では、「かねる」は「ファックスとコピー機をかねる」など二つの異なる機能が語彙として現れ、その機能への両立という肯定的意味が表面化するが、「この仕事は引き受けかねる」という場合は、二つの異なることがらは語彙として登場せず、「両立」の持つ「(決定) 不可能」という局面が支配的になるのである。

カネナイの場合、「事故を引き起こしかねない」などのように、否定が加わることで、英語の *can*, *may* のような可能性の意味が出てくる訳であるが、「両立」+「否定」=「可能」がどのようなメカニズムで成立しているのだろうか。このプロセスを説明するために、いささかの迂回が必要となる。以下に紹介する「発話理論」のトポロジーを用いたモダリティ・マーカールの記述が参考になると思われるからだ。

2. 「発話理論」におけるモダリティ論

2.1. 定義と分類

「発話理論」と呼ばれる、フランスの言語学者 A. Culioli によって創始された言語学では、言語活動 (*langage*: ランガージュ) において、個々の統語規則が互いに独立して文の生成を司っていると考えられるのではなく、述定 (*prédication*: プレディカション) ないし名詞や動詞の限定 (*détermination*: デテルミナション) という、首尾一貫した操作 (*opérations*: オペレーション) が個々の現れとなって発現すると考える。したがって、アスペクト、テンス、モダリティは別個の文法項目としてではなく、ともに動詞限定の一種として研究される。

この理論では、モダリティは何よりもまず、分類の形をとった定義の対象であった。Culioliは、1983-1984年のDEAのセミナーにおいて、4種類のモダリティを区別した⁴：

タイプ1のモダリティ：肯定のモダリティ（肯定、否定そして、肯定の拒否である疑問）

タイプ2のモダリティ：可能性、不確定性、蓋然性、偽確定性のモダリティ。しばしば認識的モダリティと呼ばれ、発話者はあらゆる述語関係に関する判断を担う。

タイプ3のモダリティ：肯定的評価のモダリティ：良さ、望ましさ、被害、後悔、等々。

タイプ4のモダリティ：このモダリティは、自分自身に関して、または他の主体に関してにせよ、言表の主体に関係する。しばしば、根本的なモダリティと呼ばれる。それが意味するのは、主体にとっての可能、能力、許可、義務（「ねばならない」）、意志、等々。このモダリティは、述語関係の内部に主体と述語の関係を築く。

この4分類を、Dufaye (2009: 20) にならって、モダリティ1（肯定／疑問）、モダリティ2（認識的）、モダリティ3（肯定的評価）、モダリティ4（義務的、物理的可能性）と要約することもできよう。実際に、発話理論のモダリティ論は近年、L. Dufayeも教壇に立つパリ第七大学英語学科において発展してきた⁵。そこでは英語の一連の法助動詞について「概念領域に関する分岐 (bifurcation)」という概念を用いた説明がなされている (Cf. Gilbert 1987, Deschamps 1998, 1999, Dufaye 2009)。彼らの主張を要約すると、トポロジ的內部をI(ntérieur)、外部をE(xtérieur)、その間の境界をIEで表した場合、例えば*may*に関して、I-----IE-----Eという図式が成立するという考えである⁶。この表象は*may*が「同-可能性」「同-蓋然性」「双方向的な可能性」のモダリティと解釈する見方と一致する。これに対し*can*や*will*

は、Iへの「一方的な可能性」つまり一本の道筋だけがあると考えられる。まとめると以下ようになる。

MAY : I -----IE-----E
CAN/WILL : I-----IE E

MAYはIとEの両方へ道が通じているが、CANおよびWILLは一方しか通じていない。このようなミニマルなパラメタを用いて複雑さを単純さに還元する試みは言語学の様々な流派で80年代から90年代を通じて一般化した手法であった。問題は、例えば否定との組み合わせで得られる *may not*、またとりわけこの用法の認識的意味の固有性を記述するのに有効ではないことである。また例えば *Lions can / may be dangerous* のように、*may* と *can* がどちらでも使える場合もある。そのような場合、表現ごとの固有性はどうか。

これらの問題に直面して、他の概念が付け加えられる。すなわち、モダリティは常に分岐の図式を喚起するが、述定作用による「確定」の操作が加わることにより、肯定文ではIへの道が「確定」され、否定文ではEへの道が「確定」されると考えるのである。例えば以下のような図式である。(確定する道筋は実線で表示)

MAY : I——IE -----E
MAY NOT : I-----IE——E

しかしながら英語の法助動詞には主要なものだけでも *may*, *can*, *will*, *shall*, *must* などが存在する⁷。それらすべてに分岐を用いてミニマルな図式を関連づけるには、述定による一方の道の確定を加えても、パラメタが足りない。そこで Deschamps (1999) では一つの仮説として Qnt, Qlt というパラメタが導入されることになる。それにより例えば以下の表が得られ

る⁸。

- 1 WILL [Qnt : I-----IE E / Qlt : I-----IE E]
- 2 CAN [Qnt : I-----IE-----E / Qlt : I-----IE E]
- 3 ? [Qnt : I-----IE---/---E / Qlt : I-----IE E]
- 4 ? [Qnt : I-----IE E / Qlt : I-----IE-----E]
- 5 MAY [Qnt : I-----IE-----E / Qlt : I-----IE-----E]
- 6
- 7 SHALL [Qnt : I-----IE E / Qlt : I-----IE---/---E]
- 8
- 9 MUST [Qnt : I-----IE---/---E / Qlt : I-----IE---/---E]

この表では、2種類の分岐（量的分岐と質的分岐）と禁止（---/---で表示）も含み9種類の組み合わせが存在し、5つの法助動詞を分類している。（?の部分は英語には語彙がない部分であり、6と8の空白は原著でも空白で示されている。）

英語に比べ、フランス語はもう少し単純なパラメーターで足りる。フランス語では、非人称で使用される *falloir* を除外すると、*devoir* と *pouvoir* が主要な法助動詞だが、*devoir* は排他性、*pouvoir* は両立性に関連づけられる。いずれの場合も「分岐」の図式が前提とされる。図式化すると以下のようなになる⁹。

DEVOIR : I-----IE---/---E

POUVOIR : I-----IE-----E

DEVOIR は IE から I と E への分岐があるものの、E への道が排除されている。それに対し、POUVOIR では両方の道がつながっている。この事から、DEVOIR が「ねばならない（義務）」「にちがいない（希望）」という意味

を、POUVOIRが「かもしれない」「可能である」「(物理的に)出来る」を意味する。

この図式が基本となるが、作り出される意味は発話の中での環境により異なりうる。例えば、*pouvoir*は、文脈によって、「できる」という意味になる場合もあれば、「かねない」という意味になる場合もあり、あるいは「かもしれない」という意味にもなるのである。しかしいずれの場合も、I-----IE-----Eという図式が根底にあり、IやEが何に当たるかに関して文脈による特定化を得て、意味が構築されるのである。

3. カネナイの「分岐」による説明

3.1. カネナイと分岐の図式

ここで、日本語のカネナイに戻る事にする。以上見て来た、英語とフランス語のモダリティ表現の「分岐」による説明は、解決しないままであった「両立」+「否定」=「可能」という式に光を投げかけた。つまり、「両立」はI-----IE-----Eという「分岐」の図式に下支えされている。そしてこの分岐する二つの道は、語彙の意味「両立」によって強く確定されている。したがって、これが単独では「同-可能性」ひいては「不可能性」を表す。さらに、否定はこれに---/---という一方の道の排除の図式を与える。この結果、I---/---IE-----Eという図式が得られる。カネナイの持つ、「望まない状態への近づき」はこのEへの道のみが確保されてしまう事から作り出されていると考えられる。Eはトポロジー的外部であり、評価的には、悪い価値、望ましくない価値に結びつけられる。

ちなみに、ハズに関連づけられるのは、同様の図式を用いるならば、I-----IE Eである。ここには、Iへの接近/近づきだけがある。Iは主体が良い評価を加える価値である。そこへの主体の力による接近をモダリティ・マーカーとしてのハズは作り出しているのである。

3.2. メタファー、文法化との違い

語彙の同一性と、意味の異なりという点において、メタファーと呼ばれている転義、例えば、椅子の「脚」や「風前の灯」などへの連想が働くかもしれない。しかしながら、メタファーは多義を生まないという点を意識しよう。原義と転義において、語彙の「意味」は変化しない。注意すべきは、メタファーは、語彙は文脈と相互作用をせずに、典型的な文脈の痕跡を新たな文脈に持ち込むことで成立していることである。例えば「権力の犬」という場合、文脈なしあるいはプロトタイプの文脈の場合の「犬＝飼いなされた動物」がそこに持ち込まれ、「権力の」は「犬」の意味に関与しない。それに対し「犬死」あるいは、*c'est bon pour le chien*（文字通り：犬にとって良い＝無価値な）において、「無価値なもの」という意味を「犬」が担うことこそ多義の問題である。この場合、コテキストの「死」が「犬」に与えられる意味に関係している。すなわちここでは「死」や *bon*（良い）という「価値」を導入する環境の存在が大きく影響している。

名詞としての「筈」はモダリティ的なハズに先行することから、文法化による説明はもっともらしく思われる。しかし、単語の意味（の潜在性）をその指示対照やそれが表すプロトタイプ的な概念ではなく、図式形式として表す視点は、歴史的順序や発展を超越したものである。つまり、「弓箭」「弓箭」の「筈」にも接近／近づきは存在し、「5時に終わるはず」のハズにも接近／近づきは存在すると考える視点なのである。意味の図式形式は、始源から最も派生的な用法に至るまで常にすでに存在しているのである。

4. 結論にかえて

ハズは、語源とされる名詞においてもモダリティのマーカールの際にも、ある物や状態への「接近／近づき」という図式をマークし、他方カネルにおいては、本動詞、助動詞という使用の違いを超えて、二つの異なる物、

状態への道筋の確立としての「両立」をマークするという図式が観察された。

「発話行為の言語学」におけるトポロジーを応用したモダリティーの記述は日本語の言語事実とも一致を見せる。モダリティは、「発話者の心的態度を表す」という、伝統的なモダリティの定義とは別に、形式的レベルで「分岐」を常に召還するのである。「分岐」の存在はモダリティというカテゴリーの共通スキーマとして、さまざまな出自を持つモダリティ・マーカ―の統語的アイデンティティとなりうると考えられる。

注意すべきは、「分岐」I-----IE-----Eという図式形式はモダリティの「カテゴリー的図式形式」であり、モダリティ表現に用いられる語彙は、それ固有の「語彙的図式形式」をもち、カテゴリー的図式に上書きすることである。つまり、ハズは「一方への近づき」をカネルは「両方の道筋の確定」を、モダリティーというカテゴリーが召還する「分岐」の図式の上に付け加える。さらに、カネナイでは否定のオペレーション「一方の道の排除」が加わることになる。その上で実際に使用される言表の中で、他の語彙要素と組み合わせられることで、これらの語彙単位は相互作用を経て多様な意味が構築されるのである。

注

¹ 「「べき」は話し手の主張、「はず」は対象に対する予想。」(森田良行『基礎日本語』p. 1019)

² Cf. accès という概念に関しては、Culioli (à paraître) を参照。図式形式 (forme schématique) に関しては、Franckel & Paillard (2007) を参照。

³ Co-texte に関しては、Victorri & Fuchs (1996) を参照。

⁴ Culioli (1985)

⁵ Deschamps (1998) (1999), Gilbert (1987) (2001) (2003), Dufaye (2001) (2006) (2009)

⁶ 普通はIEからIとEに伸びるV字の分岐を用いて表すことが多いが、ここでは

表記を簡略化して表示している。IEを中心にIとEにV字型に道が伸びている図式をイメージされたい。

⁷ 網羅的であろうとするならば、*could, might, should, would, ought to, need*なども加えなければならないだろう。また、助動詞だけでなく副詞や動詞などによってもモダリティが表わされることは言うまでもない。

⁸ Deschamps (1999: 273) のDufaye (2009: 133) による引用を簡略化して表示。Qnt : quantité (量)、Qlt : qualité (質) を表すメタ言語概念。この論文の目的からは必要ではないため、詳細には立ち入らない。

⁹ Gilbert (1987, 2001, 2003) を参考に作成。

参考文献

- Bouscaren, J. (1993) *Linguistique anglaise, Initiation à une grammaire de l'énonciation*, Ophrys.
- Culioli, A. (1985) *Séminaire de DEA*, Paris VII.
- Culioli, A. (1990-99) *Pour une linguistique de l'énonciation*, Tome I-III, Ophrys, Paris.
- Culioli, A (à paraître) *Pour une linguistique de l'énonciation*, Tome IV, *Accès, détour, obstacle*, Ophrys, Paris.
- Deschamps, A. (1998) "Modalité et construction de la référence", in Le Querler, Gilbert (éds), *La référence 1 : statut et processus*, CERLICO, 11, Presses Universitaires de Rennes.
- Deschamps, A. (1999) "Essai de formalisation du système modal de l'anglais", in Bouscaren (éd) *Les opérations de détermination : quantification / qualification*, Ophrys, Paris.
- Dufaye, L. (2001) *Les modaux et la négation en anglais contemporain*, Ophrys, Paris.
- Dufaye, L. (2006) *Pour en finir avec les auxiliaires de modalité*, Ophrys, Paris.
- Dufaye, L. (2009) *Théorie de opérations énonciatives et modélisation*, Ophrys, Paris.
- Franckel, J.-J. & D. Paillard (2007) *Grammaire des prépositions*, Ophrys, Paris.
- Gilbert, E. (1987) *May, Must et Can et les opérations énonciatives*, *Cahiers de Recherches*, Tome 3, Ophrys, Paris.
- Gilbert, E. (2001) « Vers une analyse unitaire des modalités ; *May, must, can, will, shall* » in Bouscaren, Deschamps, Dufaye (éds), *Modalité et opérations énonciatives*,

Cahiers de Recherche, Tome 8, Ophrys, Paris.

Gilbert, E. (2003) « Quantification, qualification et modalité », in Outtara (éd) *Parcours énonciatifs et parcours interprétatifs ; Théorie et applications*, Ophrys, Paris.

Le Querler, Nicole (1996) *Typologie des modalités*, Presses Universitaires de Caen.

Victorri, B. & C. Fuchs (1996) *La polysémie, construction dynamique du sens*, Hermès, Paris.